研究課題：　　超高齢社会におけるフレイルを克服する

研究者名：　　井上　誠

所属：　　新潟大学大学院医歯学総合研究科

嚥下障害患者に対する摂食嚥下リハビリテーションの臨床介入を続ける中で，今回の研究では，対象患者の口腔機能についての分類を詳細に行い，間接訓練や直接訓練の遂行と機能改善，経口摂取の推進が口腔衛生状態をはじめとする環境改善に向けてのいかなる効果をもつかについてさらに詳細に調べる．最後に，嚥下障害の臨床を行うにあたり，どのような評価項目に注意するべきかを明らかにすることを目的とする．

対象は新潟大学医歯学総合病院の入院患者の中で摂食嚥下機能回復部に摂食嚥下リハビリテーション依頼があった者と協力施設である新潟南病院入院患者の中で摂食嚥下リハビリテーションへの介入が必要とされた患者８名（男性８名，平均年齢77±9歳）とした．摂食嚥下障害の原因疾患は原因疾患は脳梗塞２名，肺炎３名，急性硬膜外血腫，頭頸部腫瘍術後，細菌性髄膜炎各１名であった．　歯科専門職による口腔清掃はハブラシ，スポンジブラシ，歯間ブラシ，フロス，必要に応じて保湿剤，義歯ブラシなどを使用し，患者の状態に合わせて原則週５回実施した．さらに，食事摂取状況，口腔内水分量，唾液分泌量，口腔内微生物量を含む口腔環境，舌圧を毎週同じ時間帯に記録した．

その結果，食事摂取にあたり，運動機能評価のひとつとして計測した舌圧（ことに舌前方圧）の値は食事摂取の改善に伴い増加する傾向があった．　また，水分値と食事摂取状況には明らかな傾向は認められなかった．食事摂取にあたり，舌運動の改善と舌苔スコアが相関する傾向があった．介入中の機能的アイヒナー分類の変化による食事摂取状況の変化の特徴は見いだせなかった．本研究の結果は，経口摂取の再獲得が舌運動の改善を伴うこと，また，口腔環境を整えることにつながることを示唆していたが，サンプル数が十分とは言えない．今後は同様のデータをとるとともに，在宅や老人保健施設入所者を対象としたデータ採取に取り組み，疾患や重症度などとの関連を探り，将来的には実際の誤嚥性肺炎予防にどの程度の貢献が見込めるかについて明らかにしたい．